

平成30年度

撫養小学校 「学力向上実行プラン」

研究テーマ

- ① 自ら考え、判断し、表現できる子どもの育成
- ② 言語活動を充実させた教育活動の充実

学力向上検討委員会構成

学力向上推進員	委員 校長(総括)
	教頭(総務)
	教務主任・研修主任・各学年主任・特別支援教育コーディネーター

(1) 基礎的・基本的な知識・技能の習得

児童生徒の状況	具体的目標(めざす子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よ さ	漢字・計算等については、殆どの子どもが学年相当の習得ができています。	① 長期休業日前後(夏季・冬季・学年末)に漢字・計算テストを実施し、児童の80%以上が8割以上正解できるようにする。	・長期休業日後は前より、全学年において、正解率は向上した。しかし、児童80%以上が8割以上正解できなかった学年もあり、問題を精選して、基礎・基本が定着するよう繰り返し練習させたい。	・長期休業日前後のプリントは、繰り返し行うことにより、基礎的・基本的な知識や技能の定着に活用することができた。また、前学年のプリントを集めた整理棚を利用することにより、個に応じた個別学習が行いやすくなった。	・冬季休業日後の計算テストは、前学年において向上し、80%以上正解した児童は前学年88%以上であった。また漢字テストにおいては、殆どの学年が目標達成できた。宿題提出は、忘れる児童が全体に少なくなり、全員提出している学年もある。
課 題	学習した知識・技能の定着が十分でない児童が少なからずおり、その差は学年が上がるにつれて大きい。	① 朝の学習(チャレンジタイム)や授業の中で、漢字・計算等の練習を継続して実施する。 ② 保護者と相談しながら個に応じた個別学習を行う。	① 漢字・計算のミニテストやチェックを計画的に実施し、知識・技能の定着を図る。 ② 児童の宿題提出率を向上させる。	評価	次年度における改善事項
				A	・朝の学習(チャレンジタイム)だけでなく、授業の中で、または終わりの短い時間に漢字・計算の練習に取り組むことは、効果があった。一方、児童自らが漢字や計算への意欲を高めるような工夫も、大切だと思われる。例えば、班対抗で、漢字の書き取りゲームを行う。(一画ずつリレーする、はらい・はね・止めや字形等で競わせる等)また、プリント学習を繰り返し行い、学年相当の計算力を身に付けると、計算名人になる等、学年で話し合い取り組んでいきたい。

(2) 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況	具体的目標(めざす子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よ さ	自分の思いや考えを進んで話そうとする児童が増えてきた。	① アンケートで「自分の考えを説明したり、文章表現したりするのが好き」と答える児童を70%以上にする。	・学年が上がる程、文章表現への苦手意識が高まる傾向があった。文章表現させる際に、いつ、どのように、何を書かせるか、今後手立てを考え、表現する喜びを育てていきたい。	・「聞き耳カード」は、朝会時の先生方の講話をまとめるだけでなく、国語・社会・総合等、友達が発表する時に、その要旨を書き留めたり、自分の考えを書いたり、児童の発達段階に応じて活用した。優れた日記・作文は、クラス全員で紹介等を行った。	・2月のアンケートから「日記・作文や感想を書くのは好き」と答えた児童は、殆どの学年で70%を超えなかった。(50%前後)朝会時の先生方の講話等、「聞き耳カード」に書くことを意識すると、児童の意識は高まり、集中力も向上することが分かった。
課 題	自分の思いや考えを筋道立てて話したり、文章で表現したりすることに課題がある。	① 「聞き耳カード」やホワイトボードを活用し、聞いたことや自分の考えをまとめさせる。 ② 学習活動の中で、自分の考えを筋道立てて話したり、文章表現したりする機会を計画的に設ける。	① 朝会時、全職員が順番に講話を行い、児童の発達段階に応じた形式で、「聞き耳カード」に書かせる。 ② 日記・作文等記述式の宿題を出す。	評価	次年度における改善事項
				B	・今年度「聞き耳カード」は、前学年において月1回実施するように計画した。実施方法として、朝会の講話を思い出して書くことが一番多かった。しかし、朝会の後、講話について書かせると、一時間目の授業にかかり、児童に負担をかけることとなった。講話の他に、教科学習の中でもっと活用できないか、児童に負担がかからないような実施の仕方を見直しをしてもよいのではないだろうか。

(3) 主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況	具体的目標(めざす子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よ さ	進んで読書を楽しんでいる児童が多く、殆どの児童がほぼ毎日宿題を提出できている。	① 学年相当の家庭学習(10分×学年)をしている児童を70%以上にする。 ② タブレットで撮影・再生できる児童(高学年)を90%以上にする。	・学年相当の家庭学習をしている児童は、学年により達成率が異なるが、どの学年も半分以上の児童が学年相当の時間、家庭学習ができた。 ・タブレットの撮影・再生ができる児童は5・6年生ともに、92%以上であった。	・読書の意欲を高めるため、図書館サポーターの先生の協力を得、読書の記録用紙は冊数で色を変えたり、多読賞を設けたりした。また読書に興味を持たせるため、図書クイズを行ったりし、図書室に行く機会をつくった。	・アンケートより、読書への関心はやや高まっている。学年相当の家庭学習は、高学年が73%以上で目標達成できた。他の学年においては目標達成できなかったが、半分以上の児童は、学年相当の過程学習が行えた。高学年のタブレットの撮影・再生は、97%以上の児童ができるようになった。
課 題	主体的に自主学習をする児童が増える一方、自分で課題を見つけたり、計画的・主体的に学習することが難しい児童がいる。	① 図書サポーターと連携をとりながら、魅力的な図書館運営を行い、読書への意欲を高める。 ② 個に応じた宿題や自主学習の仕方を指導したり、クラスで紹介し合ったりする。	① 週末や長期休業日に読書を宿題に出し、読書習慣を定着させる。 ② 優れた自主学習ノートを定期的に紹介する。	評価	次年度における改善事項
				A	・週末や長期休業日に読書を宿題に出すことは、児童の読書への関心を高めた。また多読賞をもらい、図書便りに載せることは、児童の励みにもなった。今後、学習において調べ学習として図書室をどんどん利用し、いろいろな本に触れさせることが大切だと思われる。家庭学習については、自主学習をどのようにすればよいか学年初めに説明したり、優れた自主学習ノートを度々紹介したり等、具体的に知らせる必要がある。

平成30年度 学力向上ロードマップ

